

令和5年度全国高校総体 審判員報告書

C3 審判長

安福康夫

1. 採点上の打ち合わせ事項

(1) 競技の特性について

ア 採点競技の特性について

- ・ルールに則って順位付けをすること
- ・採点結果は新体操の方向性を指し示すものであること

イ 審判のあり方について

- ・審判員としてのモラルを遵守すること。
- ・監督・選手との接触は挨拶程度とすること。

(2) 2022年版採点規則について

加点や難易度にとらわれすぎず、新体操男子の目指すものを大切に採点すること。

(3) 説明できる採点について

来年度から団体競技が5名になること、2025年度には大きなルール変更が予定されていることを鑑み、審判員として説明ができる採点をする。

2. 採点上起こった事項とその処理

- ・2022年ルールから入場時間オーバーは、音楽機材トラブルの場合減点しないことになった。今年は3件のタイムオーバーがあったが、2件は機材の読み込み遅れのため減点なし、1件は前奏時間が長かったと判断し減点ありとなった。
- ・団体の転回のつながりについて、動画を見て再確認することが数回あったが、どれも減点にはならなかった。

3. その他特記事項・意見・感想等

- ・久しぶりの応援ありの試合ということもあり、選手の演技がいつもに増して躍動感あるものと感じた。
- ・個人競技は、ジュニアから経験豊富な選手が多く、ハイレベルな戦いとなった。高い技術の手具操作や転回系を徒手体操にしっかりと組み合わせていたことが印象的であった。団体競技はチームによって技術レベルの差はみられるが、それぞれのチームにあった構成内容で試合に挑んでいる姿が印象的であった。特に転回系が弱くても徒手をしっかりと磨くことで、新体操男子の団体が持つ魅力を見せてくれたチームもあり、大変好感が持てた。
- ・最後に選手・監督・コーチの皆様、今大会を運営していただいた全国高体連並びに北海道高体連、北海道体操協会、またすべての役員、補助員の皆様方に感謝の気持ちを込めてお礼申し上げます。
素晴らしい大会をありがとうございました。

1. 採点上打ち合わせた事項

【個人】

- ・ 手具の特性に合わせた演技構成がなされているか確認する。
- ・ 加点によって構成点に影響がでるが、演技全体のAの部分の減点項目は変化しておらず、演技全体の組み立て、流れが良い構成を評価する（ただし、加点部分の得点も無視はできない）。
- ・ 構成と実施に分けて演技を見極めることが必要とされるが、構成上、実施に影響される項目を確認し、実施減点に引きずられ過ぎず構成面から適切な評価をし、それをもとに序列付けを行う。
- ・ 加点要素や要素不足の判定については、各審判員の判断に委ねるが、回転不足や転回中の手具操作について、正確に判断する。

【団体】

- ・ 加点要素の採用基準について確認した。実施ミスがあった場合の扱いについて、大きく乱れた場合を除き実施減点で処理してもらい、構成上は加点を採用することを確認した。
- ・ 転回系の定義変更があったので、転回系のスタートについて、転回系の途切れがないかを適切に判断していく。ミスにより、途切れることも考えられるので、ルールに基づき、しっかりと判定を行う。
- ・ 徒手系・転回系ともに男子新体操の重要な要素である同時性（シンクロする動き）を組み込んでいるチームを評価していく。
- ・ 自然性を欠いた動きはあまり高評価とせず、動きを止めたり途切れたりする構成より、移動などの運動量が豊富で、徒手的な内容に多様性があり、自然性がある構成を評価する。
- ・ 転回系の構成内容の多様性を見極め、同じ転回系に偏っているチームと多様性のあるチームとの評価をしっかりと得点に反映させる。

2. 採点上起こった事項とその処理

- ・ 団体において、転回系の定義は明確な空中局面があることなのだが、体が柔らかすぎるがゆえに徒手系と判断されるような事例があった。瞬時の判断では転回系に見えたため、減点はしなかったが、今後、転回系の定義を審判講習会などで明確に示す必要を感じた。
- ・ 団体において、転回系が途切れたように見えたチームがあり、動画で確認したところ、転回系の着地と動き出しが同時で、減点できないという結論になった。ただ、審判の位置によっては減点と見えることもあるので、演技構成について、つながりがぎりぎりにならないよう注意をしてほしい。
- ・ 個人の投げ受けの加点に関して、視野外や次々に投げるものなどについて、どの程度採用するか、審判員で若干の違いがあった。各審判員が見える角度にも差があり、一律に判断をそろえることはしなかったが、どの程度まで採用するかについて、今後審判講習会などで共通理解を図っていきたい。

3. その他特記事項・意見・感想等

- ・ 入場制限がない久しぶりのインターハイということで、会場にも活気が戻り、選手達も観客からの声援を受け、大会として大いに盛り上がりを感じました。近年、高校生の技術レベルの進歩は凄まじいものがあり、団体、個人とも日本のトップレベルに引けを取らない演技が多くみられました。新ルールになり2年が経ちますが、ルールに順応して、ハイレベルの演技を構成してくる、監督、選手の皆様に敬意を表します。また、会場内外が暑い中、地元実行委員会・補助役員・生徒のご協力のおかげで大過なく大会を終えられましたことを感謝申し上げます。大変ありがとうございました。

1 審判事前打ち合わせた事項

(1) ルールの確認

- ・ミスによる減点（B減点）、技術の減点（A減点）の確認をすること。
 - ・上半身だけでなく、上半身、下半身が連動してしっかり動いているか確認すること。
 - ・動きの幅が最大、最小とできているか確認すること。
 - ・運動の間やアクセントによる張りや活気がある運動になっているか確認すること。
- (2) 「動きの量及び運動の本質」がしっかりとできているか見極め判断すること。
- (3) 審判員がその責任において出した点数については、説明ができるようにきちんとチェックすること。
- (4) 選手・監督が目指していくべき方向性を示せるよう採点を行うこと。

2 採点上起こった事項とその処理

(1) 個人競技において

- ① 構成で加点を取ろうとするため運動の間やアクセントによる張りや活気がある運動が不完全な演技が多くあり採点に苦慮した。
- ② 選手の中には、下半身・上半身の連動が上手くできていて熟練性を感じた選手もいたが、細かいミスの積み重ねにより減点せざるを得ないため採点に苦慮した。
- ③ 運動をしながら手具と連動する一体感といった調和のある運動が少なかった。
- ④ 運動の始まりである、緊張と弛緩、しなやかさとスピードといった部分の運動がほとんどできていない為、運動に硬さがあり、緊張だけが目立つ運動をする選手が多かった。
- ⑤ 転回系の難度を無理やり入れ、演技全体に深さ・大きさ・スピードや柔軟性に欠け、基礎的な運動がおろそかになる傾向にある。

(2) 団体競技において

- ① 今大会から観客制限のない大会となり、観客の声援を感じながら選手・監督が努力され創り上げて来られた演技の採点を、緊張感を持って審判を行った。
- ② 新採点規則が2年目に入り、団体同時性やルールに乗った演技に近づいてきているように感じた。（男子新体操の目指す方向性）
- ③ 基礎的な徒手運動（可動域・移動幅等）を大切にして、その運動の創り上げ方がしっかりできている団体とそうではない団体によって大きく点数に差が開いた。
- ④ 徒手系の柔軟で難度を取るために前後開脚座（脚は一直線・180度）前屈を行う団体が多くみられたが、不十分と感ずることが多かった。

3 その他特記事項・意見・感想

- ・今大会を振り返り、各審判員が緊張感の中で自信を持ってジャッジにあたっていたいただきましたが、運動の質の良し悪しについて統一を図るのは難しいと感じました。
- ・団体競技においては、新体操歴が短いと思われる生徒もいる中で演技を上手く創り上げている団体もあり、改めて男子新体操の魅力を感じることができた。また、下位層の点数について教育的配慮が必要な部分もあると感じました。（順位付けをする）
- ・今大会において、大きな怪我もなく成功裡に終わったことは、大会関係者の皆様の懸命なご尽力と微細にわたる目配りや気配りがあったおかげで思い出に残る素晴らしい大会にできたのだと大変感謝しております。

皆様、本当にありがとうございました。